

令和6年2月19日

令和5年度学校関係者評価書

1. はじめに

これまで、学校の自己評価に対して、学校関係者が「自己評価の適切さ」と「改善策の適切さ」について評価していたが、本年度からその評価を統合し、本書のとおり、学校関係者評価書を作成することにした。

これによって、現在のよい部分を伸ばしつつ、学校の課題を関わる人全員で共有することを目標としている。さらに、最終的なアウトカム（≒成果）は、夕張の子どもたちにとってのウェル・ビーイングであるため、それに寄与するために必要な視点を明らかにすることを目標としている。

なお、学校ごとに20項目の評価基準が設定されており、それは5分野各4項目ごとに分類されている。この基準は概ね小・中学校で揃えている。

2. 評価者一覧

岩野 崇臣委員（部会長）、齋藤 淳子委員、谷口 鏡子委員（部会長）、蓑島 慶介委員
事務局：山口

※なお、多喜委員、八柳委員は前期の学校参観に参加したものの、日程上予定があわなかったため、評価には参加していない。

3. 評価委員会までの概要

学校参観を年度内に2回実施し、その後評価委員会を開催した。評価委員会では、各委員の結果を取りまとめ、それを共有し、そのうち特によかった点や気づき、今後必要な視点について話し合った。結果の取りまとめの際、評価されたことを「A=100、B=66.6、C=33.3、D=0」と変換し、「適切さ」を割合として表した。その取りまとめ表は、本書の末に参考として掲載している。

▷学校参観日 2023年7月19日（水）、2024年2月16日（金）

▷評価委員会 2024年2月16日（金）、2024年2月19日（月）

4. 学校関係者評価の結果と考察

4-1 評価全体の振り返り

今回の評価全体を通じて、評価委員会では学校の自己評価が概ね適正であると判断できた。特に、子どもたちをたくましく育てようとする観点と地域とともにある学校づくりをする観点では、両学校とも自己点検・改善策について適切であると共有できた。

改善策についても同様に概ね適切であったものの、相対的に適切さが低くなった項目があった。ゆうばり小学校の改善策については、評価項目「14.チャレンジ環境を整え、日常的に体力・運動能力を向上させる工夫をしている」について、優劣のつきやすいスポーツにこだわる必要があるのか、その改善策の適切さについて評価が低かった。また、夕張中学校の評価項目「8.『ゆうばり検定』の実施など、自律的な学習習慣の確立に向けて取り組んでいる」については、検定の実施についてこだわる必要があるのか、という点で、その改善策の適切さについて評価が低かった。

4-2 学校参観からの気づき

二度の学校参観では、授業の楽しさが伝わり、日々の授業改善が丁寧に行われていることがよくわかった。一方で、授業の準備が過度に必要なを迫られていないのか、心配の意見があった。働き方改革も進められているため、高度な技術が必要な ICT 機器を使い準備などをするだけでなく、準備がさほど必要ではない、言葉を正確に「話すー聞く」の関係が成り立つ授業を進めることを忘れずに取り組んでほしい、との意見に集約された。また、先生方の負担が少しでも減るのであれば、地域住民として協力したいため、何か協力できないのか、何が喜んでもらえるのか、情報共有してほしい、との意見に集約された。

授業以外では、教室内の掲示物の工夫が際立って、学びたくなる環境づくりが進められていることがよくわかった。また、学校内にあることばの教室なども、居心地のよい場所として整備されていることが共有できた。

4-3 子どもたちのウェル・ビーイングに寄与するために次年度必要な視点

委員による協議内では、子どもたちのウェル・ビーイングのために現在の学校運営において来年度以降必要性が高い視点を以下の3つにまとめた。

1点目は、iPad の取り扱いについて挙げられる。小学校では土日に持ち帰るよう指導されているようですが、iPad を土日に使用することが本当に子どもの学力の向上・学習意欲の向上につながるのか、精査が必要ではないか、という視点である。土日にしかできない活動を推進することも心掛けなければならない。

2点目は、学ぶということに対しての意識について挙げられる。仲良くしながら学ぶだけでなく身をもって学んでほしいという考えから、対立や衝突を学ぶ動機に活かすことを求める人もいるが、優劣がつきやすいスポーツなどに重きを置くことにこだわることで、子どもたち1人ひとりのその時の成長具合にあわず、自身が「劣」と感じてしまうこともある。

大切なことは、人と比べるのではなく、昨日の自分よりもどれだけ今日成長できたのか、ということである。このことを意識しないと、ただ甘やかし、不干渉な関わりになってしまうため、大人の方が今一度このことを意識し子どもと関わる必要がある、という視点である。

3点目は、評価について挙げられる。価値観が流動的な中での目標設定・実現は大変で、その評価も容易ではない。学校運営も多角的・複層的な視座が必要で、関わる人々の納得される評価に至るには、実際にその人たちが関わることを求められると考えられる。そのためにも、できる限りアンケートや項目の設問をわかりやすくシンプルにし、共通の目標を持ちやすくする必要がある。

このことについてさらに要約すれば、学校にくる子どもたち、先生、地域住民それぞれにとって「学校が楽校になっているのか」というその問いに答えることだけで、学校運営に対する本質的な評価になると意見が集約された。

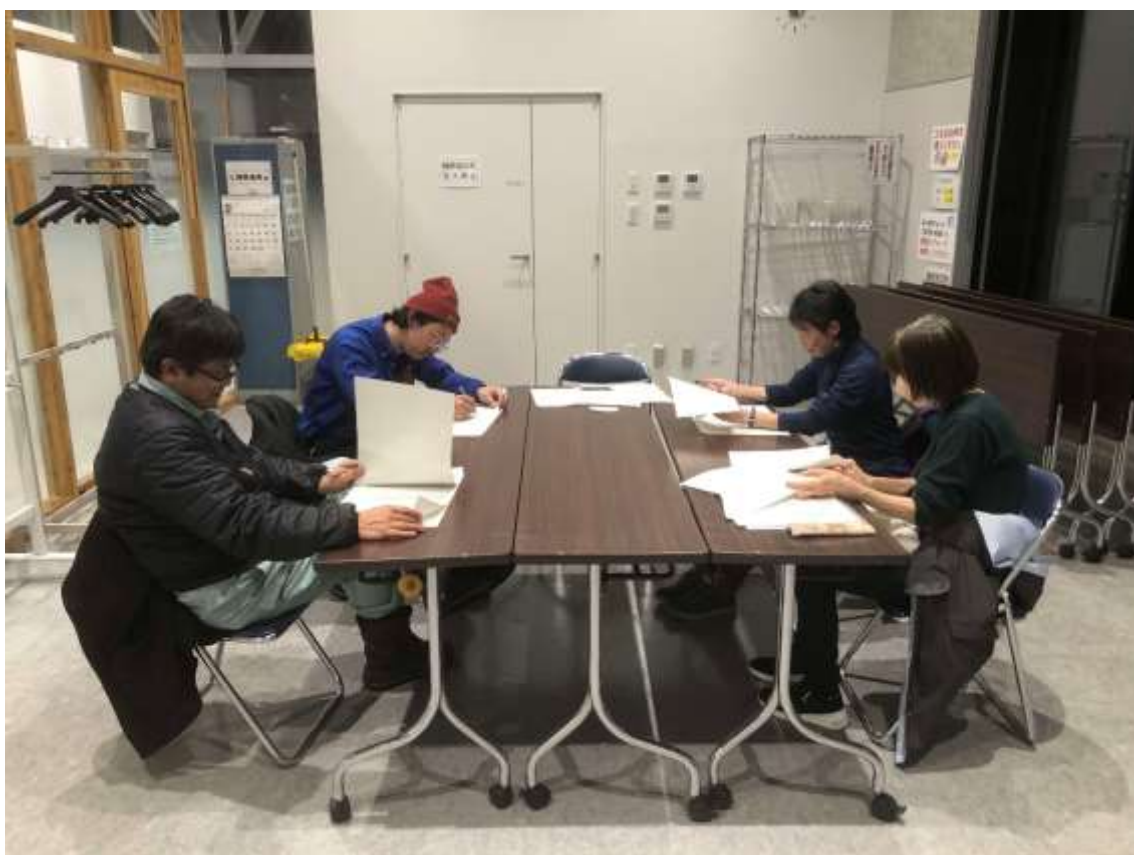
5. 総括

多くのよい点を発見できた評価となったが、ここでは前章で挙げられた改善点や提案などに加筆し、端的にまとめることで総括としたい。前章の繰り返しになる部分も多いが、箇条書きで表記する。

- (1)優劣がつきやすい物事に必ずしもこだわらず、子どもたち自身が昨日の自分と比べて、今日の自分が前向きに学習などに取り組んでいるか、という点が重要である。
- (2)夕張検定やオンライン英会話など、子どもたちの中で辛さを感じやすそうなことが、本当に学習習慣がつき意欲が高まるのか、精査が必要である。
- (3)iPad等の利用が学力向上・学習意欲向上に繋がっているのか、精査が必要である。
- (4)先生方の授業準備ができる限り少なくなるよう、「話す一聞く」を意識づけするように子どもたちに促す。そして、地域住民が代われることや助けられることを共有し、できるだけ先生方の負担がなくなるようにする。
- (5)評価は、学校運営計画とズレがないようにしつつ、よりシンプルな言葉の使い方・項目にする。さらに、時間をかけて評価ができるように、授業参観日を1日などにしないで1週間等として取り組むようにする。

学校運営協議会スローガン

やってみよう
がっこう がっこう
学校を楽校に！
～心をつなげてONE TEAM～



2月19日（月）に開催した評価委員会の様子